
頭（カシラ）と青ヒゲ

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カシラ
頭と青ヒゲ

【Nコード】

N0436I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

一匹の猫が自分の死に場所を探し彷徨っていた。冬の早朝、キンと張り詰めた空気をヒゲを揺らしながら感じて、少し身震いをする。人の齢にして百七歳、天寿を全うしようとしていると言っている。細い路地をとぼとぼと進んでいるとカラスが鳴いた。

頭（カシラ）と青ヒゲ

一匹の猫が自分の死に場所を探し彷徨っていた。

冬の早朝、キンと張り詰めた空気をヒゲを揺らしながら感じて、少し身震いをする。

人の齡にして百七歳、天寿を全うしようとしていると言っているだろうか。

細い路地をとぼとぼと進んでいるとカラスが鳴いた。

「よお、青ヒゲ。こんなに早く珍しいな。何処ぞ行くんか？」

青ヒゲと呼ばれたその細身の猫は、うにやと唸って空を見上げ、電柱の上の体躯の大きいハシブトガラスを見た。

「カシラか。朝っぱらから嫌な奴に会うのお。よりによってこんな日に……」

カシラと呼ばれたカラスが右左右と首を傾げる。

「こんな日に？今日は何ぞあるんか？」

青ヒゲはため息をついて、カラスと地面を交互に見る。

「……猫はな、死期を悟ると誰の目にもつかぬところまでひっそりと死ぬんじゃ。ワシにとっては今日がその日じゃ。又シも察しておるっ」

「いや、とんと」

「……さようか。ではワシは急ぐでっ」

歩き出した老いぼれ猫にカラスが声をかける。

「のう、どうせ死ぬんじゃ、青ヒゲ。又シの肉をワシが食らうてはならんか？」

猫は微かに笑って答える。

A 快諾する

B 断る

C 適当に流す

A 快諾する

「よかろう。死ねばワシの体もただの肉の塊。死んだ後の事など構わん」

「そうか、最近は何も漁りばかりで飽きとったところ。何ぞ変わったものでも食らうてみたかったでなあ」

「さようか、しかし老いばれ猫など食らうてもうまくはなかるうに昨日の雨が乾き切っておらず、アスファルトの地面はひんやり冷たい。」

その冷たさを我慢して、青ヒゲは隅っこの方にうずくまる。

「青ヒゲの肉ならば別ぞ。昔の武勇は今のワシの耳にも届くほど。そんな相手を食らいたいと思うのはおかしいことか？」

「ふん、買いかぶりすぎじゃ」

青ヒゲはうにやと唸って眠りについた。

まどろみの中で青ヒゲの体はゆっくりと冷たくなっていった。

大きな翼を広げ、風に乗り、人の住む雑多な街を見つめていた。

(ああ、ここはカシラの中か)

カラスの中で青ヒゲの意識はそんなことを思った。

数度翼をはためかせて電線へと止まる。

耳を澄ますと他のカラス共の噂話が聞こえる。

朝の街は人の姿などなく、スズメとカラスのたまり場である。

不意に川へ何か大きなものが落ちた音がした。

カラス共の流行の遊びで石でも落として遊んでいるのだろうか？

青ヒゲは興味を惹かれ、音のした方に向こうとしたが、体は動かなかった。

宿主であるカシラには興味が無いらしい。

(おい、カシラ。そっちの方を向け。ほれ動かぬか)

青ヒゲの声はカシラには届かず、カシラはようよう出てきた日の

光を浴びてあくびをしていた。

しばらくして、カシラは何を思ったか突然川下の方へと飛び立った。

橋げたの下の人目につきにくいところに何か引つかかっていた。カシラはそのそばへと降り立つ。

それは人間の女だった。

さっきの音はこの女が川に飛び込んだ音だったのだろうか？

カシラはおもむろに女の体をついばむ。

カシラは他のカラスと違ってあまりゴミ漁りをせずに、変わったものばかり食べたがる悪食だ。

昔ならば人間のゴミを漁る方が変だと言われていたが、今は逆だ。近くに腐るほど食うものがあるにもかかわらず、わざわざ狩りをしたがるカラスはあまりいない。

(猫の次は人間か。カシラも趣味が悪いのう)

(・・・ここはどこ?)

青ヒゲとは違う意識が近くに生まれた。

(ここはカシラのなかじゃ)

(・・・カ・シ・ラ?)

(カラスの名前じゃよ。ちゃんとした名前は、『頭に赤毛が一本あるらしいがよう分からん』というらしいが、誰もそんな風には呼ばんのぉ)

(なんか変な名前)

(そうじゃのう)

(あなたは一体誰なの?ここはどこ?何で私こんなところにいるの?私は川に飛びで・・・)

(なんだかせわしないのぉ。まずワシはのう・・・)

青ヒゲの意識はカシラの体中を巡っていた。複数の方向から声が聞こえる。

(ワシは・・・誰じゃったかのう)

(・・・もしかして私を天国に連れて行ってくれるの?・・・ありがとう)

(なんだか妙な気持ちじゃ。やはり人間など食うもんじゃないのう。のう、カシラよ)

広がり行く意識はやがて拡散し、とけていった。

B 断る

「カシラ、お前ワシの話を聞いてなかったらう。猫というのは人知れず一人でひっそりと死ぬのだと言ったであらう。誰が好き好んで又シに看取られて死んでいかなばならんのじゃ」

カシラは左右左と首をかしげる。

「嫌か？」

「嫌じゃ」

「・・・」

「・・・」

「そうか、そんなら仕方あるまい。けれど、気が変わって食われと
うなったらいつでも戻ってこい。歓迎するぞ」

カシラはクケクケクケとカラスらしからぬ笑いを残して飛び去っていった。

青ヒゲは深いため息をついて、がたのきた体をゆっくりと動かして道を進んだ。

たどり着いたのは草がぼうぼうの川原だった。

あれから川に沿って上流の方へ向かった。

下流の方は道がコンクリートで塗り固められていて、肉が土に返ることも無いので、仕方なく上流に向かっていたのである。

結局、自分の領域テリトリーの外まで来てしまった。

（まあ、時間が無いから仕方あるまい）

その日、川原の草むらの中で一匹の猫が定め通り静かに息を引き取った。

子供の笑い声が聞こえた。

川の氾濫を抑えるための土手があって、そこに青ヒゲはちょこんと座っていた。

肉体をなくした青ヒゲの魂は、そこで次の生を待つのだ。
何十回か前の前世ではよく見た光景である。
自然が自然にある風景。

その中で男の子と女の子が二人で遊んでいた。
他愛も無い情景。

しかし、まるでその一瞬を留めて置きたいかのように青ヒゲの瞳に訴えかけてくるものがあつた。

夕暮れ時、遊びの掛け声はまるで永遠のように続いた。

「あつ、もうこんな時間なんだね。私もそろそろ帰らなくちゃ」

少女が落ちかける夕日を見て少年に言った。

「じゃあ、また明日。また一緒に遊ぼうね」

少女は手を振って駆け去っていった。

少年は彼女の姿をいつまでも見送り立ち尽くしていた。

やがて日はすっかりと身を隠して、闇が訪れた。

雲が出てきているのだろうか、月光も星明かりも無く、真っ暗だ。
その中を少年は呆然と立ち尽くしている。

青ヒゲは身震い一つして何処へとも無く歩き出そうとしたその時、
少年のほうから声がした。

「彼女とはその日以来会えなくなってしまうた。次の日も、そのまた次の日も。彼女はあの日からもう二度と僕の前に現れることは無かつた」

青ヒゲが振り返ると少年が立っていたところには顔面蒼白の青年が立っていた。

「・・・約束したのに、彼女は来なかつた」

青年は静かに青ヒゲの魂に語りかけてきた。

それは悲痛な独白のようでもあつた。

「そんなもんじゃろう。子供の頃の約束など。大方、どこか遠くへ引越したとか、そんなところじゃろ」

青年は静かに首を振る。

「違うんだ。そんなんじゃないんだ。初めて彼女の生まれ変わりに出会ったそのときに気づいていれば、まだ僕の手でも何とかなつたのかもしれない。命を懸けてでも」

「ほう、生まれ変わりと出会えたのか。それは良かったのう」

青ヒゲは興味なさそうに髭を上下させながら適当に相槌を打つ。

余談ではあるが、この髭を揺らす行為は青ヒゲの癖である。

いや、すでに癖の域を超え、特技といつてもいい。

昔どれだけ早く髭を揺らせることができるか試したところ、早すぎて髭が青く光つたという逸話があるほどである。

ただ、出所がカラスどもの噂話であるが故、真偽のほどは定かではない。

「・・・彼女の生まれ変わりと出会ったのは、彼女が死ぬ間際のこと。彼女が幾度転生しようとも、僕が彼女と会えるのは彼女の死に際の一時だった。何度もこの川で溺死してしまう彼女の姿を見て、何かがおかしいと気づいたときには、川が人間達に侵されて僕の手が弱まってしまったからだ。そう・・・彼女は呪われていた。僕がこの川を治める任を放つたらかしくして彼女と遊んではかりいたから、水精の王がお怒りになって彼女に呪いをかけてしまった。それ以来、彼女の最期は決まってこの川で溺れ死んでしまう。例えば何度生まれ変わってもそれは変わらない。僕にはただ彼女が苦しんで死んでいくのを見ていることしかできない」

「・・・それでワシにどうしろと？」

青ヒゲはいつの間にか人の姿をなしていた。

その姿は老年の男性、穏やかな雰囲気醸しながらもその眼光は鋭く、口元の豊かな髭を愛おしそうになでていた。

川の精は答えず、うつむいたまま沈黙している。

「言えぬならワシが言つてやろう。自分で招いた結果をワシに尻拭いさせようとしている。そうだな？」

はっと川の精が顔を上げる。

このとき、青ヒゲの体は中年の姿へと若返っていた。

「いえ、決してそのようなことは・・・」

「そのつもりでワシに先程の話を聞かせたのだろう？」

悪気なく笑い飛ばす青ヒゲに青年はただただ自責の念から唇をかみ締めるのだった。

「ただ、ワシの命を使っても何の力にもなれないかも知れない。それでもいいのか？」

「いえ、僕はただお力添えして頂ければと思っただけです。命までかけてくださらなくとも・・・」

「構わん。ワシも幾度か前の前世で、悪がきどもに井戸へ投げ込まれたことがある。そのときの苦しみを思い、あの子に何度も味わわせたくないと思っただけだ。気にするな」

青ヒゲはそう言い放ち、不敵に笑った。

川の精は同じ年ぐらゐまで若返った青ヒゲに深々と頭を下げた。

「さあ、急ごう。時間が無い。ワシの魂が来世へ渡るその前に」

「はい」

青ヒゲの姿が少年のものとなったとき、それは起こった。

その体が一気に老いていったのである。

少年、青年、中年、老年、そして最期には泡となって消えてしまった。

その日、雨が降った次の日だというのにその川だけが他の川と異なり、太平の海のように穏やかだったという。

ただ出所がカラスどもの噂話であるが故、真偽のほどは定かではない。

C 適当に流す

「ほんにカシラは悪食じゃのう。今の時代、食うものなどそこらへんに転がっておるう。何故変わったものばかり食いたがるのじゃ？」
「ふん、悪食とは心外ぞ。死骸を食らうカラスのどこがおかしい？人間のゴミばかりを食らうのがカラスの本性ではない。決して飼われてる訳ではないのじゃからな」

「では他のカラス共はどうじゃ？」

「・・・他のものなぞ知ったことではない」

「カシラ、時代は変わったのじゃ。この街の中で人間と全く関わらずして生きていけようか？山は削られ、地は固められ、水は濁り、空気は汚い。他のカラス共はこの劣悪な環境に適応しているだけじゃ。それなのにカシラだけは野生にこだわり続けておる。これを変わり者と呼んではおかしいか？」

「ふん、死ぬ間際までほんにうるさい猫ぞ。本当に死期が近いのか疑わしくも思える。しかし青ヒゲ。又シにとやかく言われとうないのう。又シもワシとあまり変わらぬ気質の持ち主よ。その又シが何だかんだと言うのは少しおかしくないか？青ヒゲ」

「ワシは・・・もうすぐ死ぬでのう。ワシには時代も人間も関係ないからいいんじゃない。」

「な、何じゃそれは。いろいろ言うて又シは逃げる気か？」

「逃げるもなにも、ワシはもう疲れたんじゃない」

「何じゃと？」

カシラが電線の上でバタバタと騒いでいるのを尻目に、青ヒゲは歩き出した。

少し歩いて立ち止まり、振り返ってカシラに別れを告げる。

「カシラよ。世の中には必ずと言ってよいほど変わり者がある。それは世にとって変わり者が必要だからじゃ。だからワシはカシラが悪いとは一言も言っておらん。むしろ又シにはそのままであって

欲しいとすら思うほどじゃ。それでは変わり者で、悪食で、頑固者のカラス、カシラよ。さらばじゃ」
カシラはしばらく間を置いて、再びバタバタと騒ぎ出した。
ただその眼前にはもう老猫の姿はなかった。

(妙なところで時間をくった。体が重くて仕方がない。果たして死に場所が運よく見つかるものか?)

青ヒゲはいつも猫の集会が開かれる公園のそばを通り、川に沿って歩いていった。

昨日の雨で川の水量は増し、濁って勢いのある水が流れている。

(いざとなれば、この川に落ちるもよしとするか)

重い足を前へと運びながら進んでいくと、人間に出くわした。

その少女はじつと川を見つめていた。

気づかれぬようにと青ヒゲは心の中で祈ったが、今日は厄日なのですぐに捕獲される。

「あらどうしたの、お前？何処か体の具合が悪いの？」

青ヒゲはうにやと唸っただけで抵抗もせずに少女の懐へと収まる。

(急いでいるというのに、体に力が入らぬ)

「どうしたの？おなかが減っているのかな？」

少女は何やら食べ物らしきものを青ヒゲの口元へやるが、青ヒゲは人の匂いのするものを食べないようにしているため、拒否した。

(しもうた。適当に食うふりをして、元気になったと見せかけて逃げればよかった)

いつもなら簡単に逃げ出せただろう。

いや、捕まることすらなかっただろう。

しかし、青ヒゲの命は尽きようとしているのだから仕方がない。

「困ったなあ、私、死のうと思ってここに来たのに。どうしよう」

(ああ、頼むから離してくれ・・・体が・・・もう・・・)

「・・・あのね、私の話聞いてくれる？」

少女は懐の中でうずくまった猫に話かける。

「私の家は両親共働きで、家では私一人でいることが多いの。友達もいたし、好きな人もいたし、学校では別に何も感じないの。でもいったん家に帰ると、ああ、私って独りなんだなあってすごく思う。でも親には親の人生があつて、友達にも、好きな人にも。だから、私のわがままでそれを壊しちゃいけないって思うの。自分には自分の生き方があるし、親も親の生きたいように生きればいい。だから、独りであることは別に寂しいことじゃないんだってずっと思い込んできた。今思えばただの強がりだったのかもしれない。ただ、寂しさをきちんと伝えていれば良かったのかもしれない。けれどもう遅いわ。きつかけは些細なものかもしれないけれど、虚勢を張って、背伸びをし続けていくのはもう嫌。どんどん泥沼にはまっていくだけ。だからもう死ぬしかないって思ったの。自分の人生だもの。自分の死に方だつて自由に決めても悪くないと思うわ。・・・だからこの川に来た。私、この川を見ていると不思議と心が落ち着くの。なんだか懐かしいような、そんな感じがするの。だから、この川で死んだらきつと楽になれる。そう思うの。」

青ヒゲの体は少女の懷に抱かれたまま冷たくなっていった。

その様子を一羽のカラスが見ていた。

そしてカアと一鳴きして飛んでいった。

その後、少女が猫の異変に気づき動物病院へと駆け込んだが、その魂はもうこの世には無かった。

青ヒゲは、両親に連れられて家へ帰っていく少女の懷で涙に溺れ死んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0436i/>

頭（カシラ）と青ヒゲ

2010年10月8日15時28分発行